

「見よ、この男だ」井上隆晶牧師

イザヤ 50 章 4～9 節、ヨハネによる福音書 19 章 1～16 節

①【見よ、この人だ】

今日は裁判を受けるイエス様についてお話をしましょう。

イエス様は夜中に捕らえられ、明け方にピラトの官邸に連れて行かれました。ピラトはイエス様にいろいろな事を質問しますが、罪を見い出せません。そこでイエス様を鞭で打たせました。兵士たちはイエス様に茨の冠をかぶせ、紫の服を着せて王様の格好をさせ「ユダヤ人の王、万歳」と言って平手で打ち、馬鹿にしました。ピラトは無力なイエス様の姿をユダヤ人たちに見せれば、訴えを引き下げられるだろうと思い、イエス様を彼らの前に引き出します。「イエスは茨の冠をかぶり、紫の服を着けて出て来られた。ピラトは『見よ、この男だ』と言った。」(5 節)とあります。

●「見よ、この男だ」をラテン語で「エッケ・ホモ」といいます。有名な言葉です。讃美歌 21 の 280 番「馬槽のなかに」という讃美歌の 4 番にも「この人を見よ、この人にぞ、こよなき愛は現れたる」と由木康牧師は歌詩を書きましたが、ここにも使われています。榎本保郎牧師は「エッケ・ホモ（この人を見よ）」という題のキリストの生涯を書きましたが、未完成のまま永眠されました。25 回分の原稿が残されていましたが、今回それが出版されました。その本の冒頭で榎本恵牧師は「まさにこの人(キリスト)を通して、私自身を見つめることに他ならない」と書いています。

ですから、この茨の冠をかぶった無力なイエス様を私たちも、見なければなりません。これを見て、本当の自分の姿が分かるからです。

②【祭司長（宗教者）たちの罪】

すると祭司長たちは「十字架につけろ。十字架につけろ」(6 節)と叫びました。祭司長たちはどうしてそんなにイエス様を憎み、恐れるのでしょうか。それは、イエス様が何一つ罪を犯したことがないお方だからです。そんな人間は今まで見たことがありません。祭司長たちは唯一正しく、清いイエス様が現れることによって、自分の偽りが顕わになることを恐れたのです。エデンでアダムが罪を犯した時、彼は裸である事、つまり自分が弱く、貧しい者であることを知っていちじくの葉で腰を覆いました。それ以来、人間はいろいろなもので自分を飾っています。祭司長は宗教的な正しさで覆い、律法学者たちは知識で覆いました。飾りは本当の自分を隠すことであり、偽ることです。真実な神の前では、本当の姿、裸の姿で立たなければなりません。いかなる言い訳、飾りも通用しません。

③【ピラト（政治家）の罪】

ピラトはイエス様に「わたしはこの男に何の罪も見い出せない」(6節)という、ユダヤ人たちはピラトに応えました。「律法によれば、この男は死罪に当たります。神の子と自称したからです。」(7節)ピラトはこの言葉を聞いて恐れ、再び総督官邸の中に入って「お前はどこから来たのか」(9節)とイエス様に尋ねます。出身地を尋ねたのではありません。「お前は、本当は何者なのか?」という問です。ユダヤ人ではなく、異教徒であるピラトの方が「神の子」という言葉を恐れました。彼の方がまだ正しい感覚を持っています。ピラトは宗教に関わることを避けて生きてきましたが、突然、彼の人生の中に神が入って来たのです。この神を目の前にして答えを出さなければならなくなりました。しかしイエス様は何も答えられません。旧約聖書の中にも「彼は口を開かなかった。」(イザヤ 53:7)、「私は顔を硬い石のようにする」(同 50:7)と預言されています。「私に答えないのか。お前を釈放する権限も、十字架につける権限も、この私にあることを知らないのか。」(10節)と言いますが、イエス様は「神から与えられていなければ、私に対して何の権限もないはずだ。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪はもっと重い。」(11節)と言われ、逆にピラトを恐れさせました。そこでピラトは何とかしてイエス様を釈放しようとしませんが、群衆は叫びます。「もしこの男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない。王と自称する者は皆、皇帝に背いています。」(12節)群衆は「イエスという王か、ローマ皇帝という王かどちらかを選べ!」とピラトに迫ります。人は二人の王に仕えることはできません。ここで裁判にかけられているのはイエス様ではなくて、実はピラトであったことがはっきりしました。イエス様を釈放すれば、ユダヤ人から訴えられ、自分の地位が危うくなります。さりとてイエス様(真理)の敵となることも怖いのです。ピラトは板挟み状態です。権威があるようでなく、強いようで弱いのです。正しいと思うことが出来ません。神よりも人を恐れたからです。人を神にしたからです。これも偶像崇拜です。そしてついに彼は、ユダヤ人たちにイエス様を引き渡してしまいました。これが政治家の罪です。票が第一、人気が第一です。神を捨てた人間からは権威も去るのです。

④【群衆の罪】

この後、ピラトが「あなたたちの王をわたしが十字架につけるのか」と言うと、祭司長たちは「私たちには皇帝のほかには王はありません。」(15節)と答えます。イエス様のことを「神を冒瀆する罪」で訴えた彼らが、神を王とせず、皇帝を王と告白しました。ここで彼らの本性がついに顕わになりました。つまり彼らが偶像崇拜者であることが暴露されたのです。彼らは自分の思い通りになってくれる神(偶像)を求めていたのです。

●今、アメリカのトランプ政権とイスラエルのネタニヤフ政権は一緒にイランを攻撃しています。彼らにとって力こそがすべてであるようです。それはロシアも同じです。強いアメリカ、強いイスラエル、強いロシアを皆、目指しています。

しかしパウロは「私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものです」（Iコリント 1：23）と言って、キリスト教は十字架につけられた弱いメシアを宣べ伝えるのだと言っているのです。ユダヤ人にとって十字架につけられ殺されるようなメシアは受け入れられません。それは人々が十字架の上のイエス様に向かって「メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」（マルコ 15：32）と罵った言葉からも分かります。ユダヤ人は強いメシアを求めています。イスラエルは昔も今も変わりません。傷だらけになり、茨の冠をかぶったイエス様の姿を見た時、ユダヤ人の中に深い失望が生まれたことでしょう。

⑤【本当の罪ある自分を認め、神の前に立つこと】

ここまで話してきて、キリストの前で祭司長、ピラト、ユダヤ人たちの飾りが次々と剥がされ、彼らの偽りの姿が露わになったことがお分かりになるでしょうか。神が何も答えられない理由はそこにあったのです。すなわち、人の罪を暴くためなのです。神は存在自体が真理です。神は鏡のようなもので、黙ってそこにいてだけで、人の本当の姿を映すのです。それはちょうどモナリザの本物の絵が、黙ってそこに置かれただけで、数多くの偽物のモナリザの絵が暴かれるのと同じです。本物は主張しません。証明してもらう必要もありません。ユダヤ人たちは目の前に現れた弱いメシアを見て、それを捨てたのです。もし彼らが真理を愛するのなら、キリストを愛したはずですが、しかし彼らは光よりも闇を愛したのです。真理ではなく偽りを愛したのです。神ではなく、自分の思い通りになってくれる偶像を愛したのです。それがもう裁きになっています。（ヨハネ 3：19）

●私は大学の時、統一協会に行きました。そこでイエス様の十字架は失敗だったと教わりました。しかしどう見ても、私には失敗には思えませんでした。なぜなら、どんなにイエス様を人間が罵り、憎み、馬鹿にし、十字架につけても、この方の口からは愛の言葉、赦しの言葉しか出て来なかったからです。イエス様は十字架の上で「父よ、彼らをお赦してください。」と祈られました。これは普通の人間ではありえないことです。私たちは他人が自分を批判するひと言で、心の中に怒り、憎しみ、裁く心が湧いてきます。いくら我慢しても、取り繕っても、必ず悪い心が湧いてくるのです。これが私たちであり、本当の姿です。しかし神は、人間をそのようには創造されませんでした。悪い思いを持ち、罪を犯し、人を傷つける言葉を吐き、人を殺し、やがて自らも死ぬようには創造されなかったのです。だからこれはあってはならない異常な姿なのです。イエス様だけが本当の人であり、神の子であり、神の望まれる生き方をされた方です。だから十字架は失敗とは思えなかったのです。私は十字架の上に、本物の人の姿を見たのです。

キリスト神は今日も沈黙して、弱くなって、人々がどのようにご自分と、神がお

造りになった人々を扱うかを見ておられます。アメリカ兵がイスラム教徒の家に入り、コーランを破って燃やし、壁に十字を書いたそうです。何と罪深いことでしょう。神の顔に泥を塗る行為です。神は悲しまれるでしょう。神の沈黙は、あなたが自分の罪に気づいて回心するための憐みの配慮なのです。それはあなたが最後の審判の時に滅びないためなのです。今度は容赦なく、彼の口はあなたの罪を責めるでしょう。ああ、私たちが自分の罪を本当に知る者になれますように。そして慈悲深いキリストの十字架に栄光を帰しますように。